

〔原 著〕

## 幼児期の障害児をもつ父親の養育行動獲得プロセス

竹村 淳子<sup>1)</sup> 泊 祐子<sup>2)</sup>

### 要 旨

本研究は、幼児期の障害児をもつ父親が、どのようにして養育行動を獲得してきたかを明らかにすることを目的に、障害児をもつ12名の父親に半構成的面接を行った。面接内容は、研究参加者の承諾を得て録音し、逐語録に転記して、グラウンディドセオリーの手法を用いて分析した。その結果、以下のことがわかった。

父親は、【障害児の世さに四苦八苦】する経験から、【世話を回避できない妻の姿につき動かされる】ように、子どもの世話をしていた。父親は世話と仕事の葛藤から【あるべき障害児の父親像を模索】した。こうした父親の行動の起こし方は、妻の大変さを受けて自分の行動を方向付けるという特徴が見られた。父親は、【障害児の世さに四苦八苦】した経験で、【障害児と暮らす土壌を作る】と同時に、【新たな障害観を手にする】ことができた。そして、【あるべき障害児の父親像を模索】する段階を抜け、【夫婦でやっていこうと腹をくくる】ようになった。父親がこうした覚悟をするのは問題を自分の中に留め、家族の中で解決を図ろうとする男性特有のコーピング行動を反映していると考えられた。

キーワード：父親、障害児、養育行動

### 1. はじめに

幼児期の障害児の養育は、健常児と同じような苦楽があるといわれる一方で、障害児特有の育てにくさも報告されている<sup>1)~5)</sup>。障害児の母親が感じる養育困難は、日常の世話の他に障害児の身体上のケアが加わること<sup>5)</sup>であるといわれている。障害児を育てていく過程で、母親は様々な困難を経験しながらも身近な人々を支えに<sup>2)5)~7)</sup>家族内外の資源を活用し、強みを獲得していた<sup>5)6)8)</sup>。

一方父親の障害児への養育に関しては、母親の育児を見守る時期を経て母子の快適な生活環境を作る努力をすることや、母親の気持ちに共感することに意義を見いだすという役割を行っていた<sup>9)</sup>。また父

親の中には、子どもの障害程度によって仕事の変更をするなど、障害児の誕生が父親の職業生活を巻き込まざるを得ない状況があった<sup>2)10)</sup>。父親の仕事の変更は、特に脳性麻痺などの障害児にその傾向がみられた<sup>10)</sup>。障害児の世話は、母親一人では負担しきれないことから父親の関わりを余儀なくしていたと思われる。このことから、父親は仕事を調整して障害をもつ我が子の養育をある程度は引き受けていることが伺えた。しかし、父親が障害児の日常的な世話をどのように身につけていったのかは明らかになっていない。そこで本研究は、幼児期の障害児をもつ父親が養育行動をどのように獲得してきたのかを明らかにすることを目的とした。このことが明らかになることで、父親を視野に入れた障害児と家族の養育支援を、個々の実情に合わせて構築するために役立つと考える。

<sup>1)</sup>滋賀県済生会看護専門学校

<sup>2)</sup>岐阜県立看護大学

## II. 研究方法

### 1. 研究デザイン

本研究では、グラウンデッドセオリーによる<sup>1)</sup>質的記述的研究方法を用いた。

### 2. 研究参加者とリクルート方法

幼児期の障害児への養育経験をもつ父親とした。幼児期の養育について語るには、感情に左右されず冷静に振り返れる学童期以降の障害児をもつ父親を研究参加者とするのが一般的と考えられる。しかし広瀬ら<sup>2)</sup>の報告をみると、父親は日常の細かなエピソードより入学前後の苦悩など比較的大きな出来事を想起していた。このことから現在幼児期の障害児を養育中の父親と、その頃の事を冷静になって想起してもらえる父親の両方を研究参加者に入れるようにした。家族状況は、母親が健在で親子が同居していることとした。実際に研究参加の協力を得られたのは32歳から56歳の父親12名であった。家族構成は、祖父母との同居者が3名、核家族が9名であった。子どもの年齢は、1歳、2歳、3歳が各1名、4歳が3名、5歳が2名、7歳、8歳、9歳が各1名、18歳1名であった。18歳の子どもをもつ父親の場合、日常の細かな出来事は忘れていても考えられるが、記憶に残るエピソードや経験は重要であると判断し参加者に加えた。障害の種類は脳性麻痺、筋疾患、脊髄小脳変性症をもつ男児3名、女児9名で、障害程度は日常生活全面介助8名、日常生活部分介助3名、日常生活部分介助で知的障害重度が1名であった。きょうだいをもつのはこの内10名であった。

研究参加者のリクルートは近畿圏内の障害児通所施設、小児専門病院の施設長に研究主旨を説明し、理解を得た上で該当条件に合った研究参加者を紹介してもらった。紹介された父親へは研究者が直接連絡をとり研究の主旨と質問内容を説明し、承諾の得られた父親には記憶が想起できるようアルバムやメモの持参を依頼した。

### 3. 面接内容とデータ収集方法

データは2003年6月から9月にかけて半構成面接法にて収集した。面接は家族の紹介をしてもらった後子どもが生まれたときの様子を尋ね、父親が子どもにしてきた世話やしつけを順に思い出してもらう方法をとった。また、内容に応じて質問を追加した。面接回数は1~2回、1回の面接時間は平均57分であった。面接場所は父親と相談し、通院先、自宅、大学研究室のいずれかで行った。

### 4. データ分析方法

面接で得られたデータを逐語録に起こし、父親の養育行動に関して意味のある文脈に区切りコード化した。コード化と並行して出てきた概念を継続比較し、そこで立てられた仮説を検証するために、反証となるような研究参加者を選び概念を精緻化していった。

分析結果の信頼性、妥当性を高めるために研究参加者の一人に研究結果を提示し、確認してもらった。また、データ分析過程で障害児看護の経験を10年以上もつ看護師2名と、障害児看護の経験をもつ看護教員1名にディスカッションに参加してもらった。

### 5. 用語の操作定義

「障害児」：本研究においては、神経・筋系、骨格系などの器質的または機能的な障害のために正常な運動機能が妨げられ、移動や日常生活において特に配慮を必要とする状態の子どものことをいう。

「養育行動」：子どもが育つ過程において、親が子どもに対して行う生命の維持・保護、危険防止、成長発達の促進、情愛表現に関する行為のことであり、日常生活上の世話、しつけ、情愛を示す行為とする。

### 6. 倫理的配慮

面接に際しては、研究参加は自由意志でありいったん承諾した後もいつでも拒否できること、苦痛に感じることは話す必要がないことを説明した。さらにプライバシーは厳守することを約束し、書面で同意を得た。面接は承諾を得て録音した。面接記録は匿名性が守れるよう記号化し、研究終了後に破棄した。

表1. 父親の肢体不自由児に対する養育行動のカテゴリ

カテゴリ	サブカテゴリ
・障害児の世話に四苦八苦	・治療に奔走する ・子どもの世話に明け暮れる
・世話を回避できない妻の姿につき動かされる	・かかりきりの妻を案じる ・沈みがちな妻をもり立てる ・妻のオーバーワークを察して動く ・解放時間の提供
・あるべき障害児の父親像を模索	・世話と仕事のやりくり ・世話と仕事との葛藤 ・障害児の父親としての指標探し
・障害児と暮らす土壌を作る	・理解者を増やす努力 ・障害児の世界になじむ努力 ・福祉サービスの利用に骨を折る ・教育機関へのねばり強い交渉
・新たな障害観を手にする	・受け容れがたさとの葛藤 ・同情への反発 ・障害を痛感 ・この子はこの子と思える ・自分に幅が出る
・夫婦でやっていこうと腹をくくる	・祖父母は障害児に手が出ない ・男女分業では回らない ・夫婦でやるしかない

### III. 結 果

#### 1. 父親の養育行動獲得プロセスの全体

面接で得たデータを、父親の養育行動が語られた946文節に区切ってコード化し、6つのカテゴリ、21のサブカテゴリが抽出された(表1)。カテゴリの大きさを【 】, [ ]の順に表し、父親の語りは縮小ポイント「 」で例示する。

見出された上位カテゴリは、【障害児の世話に四苦八苦】、【世話を回避できない妻の姿につき動かされる】、【あるべき障害児の父親像を模索】、【障害児と暮らす土壌を作る】、【新たな障害観を手にする】、【夫婦でやっていこうと腹をくくる】の6つであった。

障害児をもつ父親の養育行動獲得プロセスは、【障害児の世話に四苦八苦】する経験を前提として、【世話を回避できない妻の姿につき動かされる】ように日常の養育行動を起こし始める。父親は【世話を回避できない妻の姿につき動かされる】経験を核として、自らの養育姿勢を振り返り、あらためて【あるべき障害児の父親像を模索】し始める。同時に無我夢中で

やってきた【障害児と暮らす土壌を作る】行動を基盤にして、【新たな障害観を手にする】認識ができる。父親はこれらの養育行動を獲得し、自らの成長に気づいて【夫婦でやっていこうと腹をくくる】覚悟をもつに至る。それらを図1に示した。

【障害児の世話に四苦八苦】、【世話を回避できない妻の姿につき動かされる】と【あるべき障害児の父親像を模索】は、段階を追って進むため矢印で示し、【障害児と暮らす土壌を作る】はこれらの段階を経るときに同時に広がる行動であるので背面に描いた。父親は【障害児と暮らす土壌を作る】プロセスで【新たな障害観を手にする】認識が生じてくるので側面に描いた。【夫婦でやっていこうと腹をくくる】は養育行動の帰結になるので、矢印で上位に示した。

#### 2. 障害児の成長過程で獲得した養育行動

##### 1) 【障害児の世話に四苦八苦】

このカテゴリは、父親が通常の育児上の世話に加え、障害をもつ子ども特有の世話に苦闘している様子をいう。

父親は、子どもの障害が判明した時点から、様々な局面で心情が揺れ動き、また子どもの成長途上で子

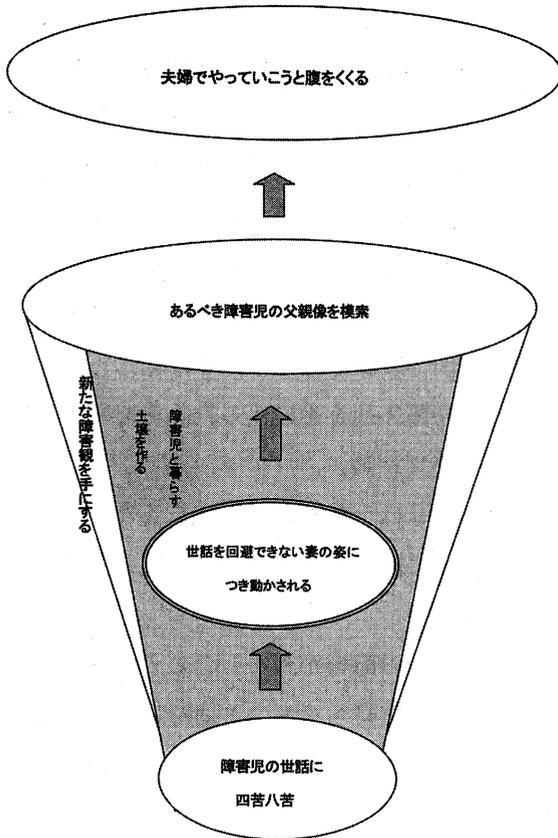


図1. 幼児期の障害児をもつ父親の養育行動の獲得プロセス

どもの障害の改善や身体状況の好転を願って〔治療に奔走〕し〔世話に明け暮れ〕ていた。

「いや退院してから、もう世話、世話でおむつを一人ずつ、二人おったんで同時にやらなあかんし、風呂も入れに早よ帰って、で、風呂から出たらもう一回会社行ったり、飯もほとんど食ってへんかった。」

2) 【世話を回避できない妻の姿につき動かされる】

このカテゴリは、父親が障害児の世話を主に引き受ける立場にある妻をみて、心身の疲労を推察し、その妻のために動かざるを得ない養育行動の起こし方をいう。

父親は、障害児の誕生以後、心身の疲労が感じられる妻を見て、〔かかりきりの妻を案じ〕ていた。

「発作を起こすと呼吸が止まるでしょ。だからセンサーをつけて、…中略…あれ夜中も着けてるじゃないですか。ちょっと暴れたらビビッと鳴るし。それが大変でねえ。嫁さんの方が、もう寝不足みたいになってしまっ

て。」

父親は、世話を主に引き受ける妻が気落ちしないよう気を配り、妻の気持ちを明るい方向に向けるべく〔沈みがちな妻をもり立てる〕気配りをしていた。

「なんせ嫁さんが陰気な感じになったらあかんわって、そういうふうに関心もってしまおうとか、そうならんようにせなあかんかなと思って、それが俺の役目かなって思ってる。」

父親は、妻に対して心情的な配慮をしているだけでなく、障害児の世話と家事に手一杯の現状を察して、〔妻のオーバーワークを察して動く〕という実際的な行為も行っていた。

「ちょっとでも、(妻の)手助けになればなあって思っでやってるんです。…朝、療育センター行くんやったら、起きて風呂洗ろとかなあかん一とか。」

父親は、さらにストレスを発散しにくい状況の妻の息抜きに家事、障害児の世話からの〔開放時間の提供〕という機会を作っていた。

「土日くらいは(自分が障害児を)みてる。でない、いつもつきっきりやからね。どう頑張ったって、ずっと家にいるし。「遊んでこい」って言うて。」

3) 【あるべき障害児の父親像を模索】

このカテゴリは、仕事をもつ父親が日常の世話を行いつつも、障害児を育てる父親としての自分に揺らぎを感じ、規範となる障害児の父親の姿を求める行為や心情をいう。

父親は、障害児の世話は妻任せにできないと感じ、自分の仕事と障害児の世話の時間を確保するための工夫をして、〔世話と仕事のやりくり〕をしていた。しかしその一方で、職業人として自己実現を果たしたいとの気持ちがあるため、〔世話と仕事とのジレンマ〕を感じていた。

「土曜日とか日曜日とか出勤をしておいて、そしたらその分、休みをもらって、半分半分に、1日を半分とか取れるんです。午前中休んだり午後休んだり。」

「本当はもっと早く帰って子どもの面倒みたりした方がいいかもしれないんですけど。例えばそうすることによって会社の方は、私が置かれている位置っていうの

が、たぶんすごく下がると思うんですよ。」

父親は、世話と仕事に葛藤しつつ、妻との会話から自分は「障害児の父親」として合格点に達しているのかという〔障害児の父親としての指標探し〕をし始めるが、何が正しいのか判断基準がなく、自分はどうしていけばよいかを見いだそうとしていた。

「他のお父さんはどうしてるのやろ。嫁さんは「他のお父さんはもっとやってる」といっている。」

3. 【あるべき障害児の父親像を模索】する段階を抜ける力となった養育行動

1) 【障害児と暮らす土壌を作る】ことで生活の基盤づくりをした養育行動

このカテゴリは、父親が現実の子育てで生じる問題に対応し、障害児とともに生活しやすいよう周囲を整えていくことをいう。

父親は障害児の誕生後、障害児が家族として存在し暮らしていることや、育児に配慮が必要なことを周囲の人にわかってほしいと思い、〔理解者を増やす努力〕をしていた。

「何かあれば、子どもの方に、救急の時は全部行くように、もうその辺は（上司に）言ってます。」

父親は障害児を育てることにとまどいながらも、似た境遇の人との接触をもち、連帯意識を感じるとともに、〔障害児の世界になじむ努力〕をしていこうとしていた。

「そういう子を持つ人同士で話ができたら楽しいやろ、とか。みんなその子だけじゃなくてきょうだいもいるわけだから、きょうだいはいるけどこの子に対してはみんなどうなん？とか。」

公的サービスの利用は養育の助けになるといわれているが、父親は具体的な内容や手続きにわかりにくさを感じつつも、何とか我が家に取り入れようと〔福祉サービスの利用に骨を折る〕状態であった。

「たとえば町の福祉に行って、どうのこうのっていうのも、冊子、大きなのくれるけど、だいたい老人のことを主で書いてます。うちの子に該当するところはどこだって。」

幼児期の後半になると教育機関への関わりが生じ

てくる。障害児の入園・入学についての考えを最初に口にするのは妻であったが、父親も障害児の受け入れをめぐって難色を示す教育関係者に対し、〔教育機関への粘り強い交渉〕を行っていた。

「（教育委員に向かって）そこまでは言わんほうがええんちゃうかなと思いつつも、そんならまあ、学校へ行って一緒に言おうかという感じですね。私が後押ししてらって言うか、援護射撃してらって言うか。」

2) 【新たな障害観を手にする】ことで障害に向き合うまでの養育行動

このカテゴリは、父親が障害児を養育する様々な局面で、徐々に障害に対する見方が変化していくことをいう。

父親は我が子の障害がわかったとき、そのことを受け容れがたい気持ちをもつと同時に、現実を受け容れて世話に向かおうとする〔受け入れがたさとの葛藤〕があった。

「この子がおらへんかったらな、と思いましたがね、最初は、今はもう考えが変わってきて、そうなる運命やったんやろって。」

父親は障害児を連れての外出の際、障害児をもつこと、あるいは育てていくことを悲観にとらえた他者の発言に対して〔同情への反発〕を覚えていた。

「同情の目で見られるとか、「大変だね」とか、それはちょっとやっぱり嫌ですよ。」

日常生活の中で、父親は何らかのきっかけに発達が遅れていることに改めて気づかされることがある。そのことで〔障害を痛感〕し、我が子の障害の事実を実感していた。

「ある程度大きくなれば、やっぱり同じ時に生まれた子どもさんとか（見るのが）ありますので、ちょっと遅れてると思った。」

わが子の障害を直視できるようになった父親は、障害児の成長に関して、健常児と比較をするよりも〔この子はこの子と思える〕ようになり、我が子独自の成長を重要視するようになっていた。

「だんだんこの子の成長は3年か5年で1歳（の発達）と考えるといたらええんやね、というふうを受け容れざ

るを得ないし、受け容れるようになってきてますね。」

父親は障害児を育てたこれまでの経験をふと思い返し、障害児の誕生以前の自分との比較から〔自分に幅が出る〕と実感していた。

「何でも母親、お前がやっつけよ。ウンチ、そんな汚いもん男が見られるか。…僕自身も若い時にはそういう気持ちありましたから。ここへ来て、便はそんな汚いもんじゃないんや。この子の健康状態が見られるのは便や。そういうことをやっと思えるようになってきたんですよ。」

#### 4. 【夫婦でやっていこうと腹をくくる】覚悟をもつまでの養育行動

このカテゴリは、障害児を育てていく主体は夫婦であり、子育ての実際的な行動も夫婦二人でやっていこうと父親が強く自覚する姿勢を見せることをいう。このカテゴリは、これまでの養育行動の経験から得た帰結である。

父親は障害児の世話の特殊さに躊躇する祖父母の様子から〔祖父母は障害児に手が出ない〕と感じ、世話への協力は積極的に依頼していなかった。

「この子がああいう格好（関節拘縮による姿勢の変形）しとるから、触るのも怖いって感じ。」

父親は障害児を養育していく日常生活は、伝統的な〔男女分業では回らない〕と気づき、我が家の実状に応じたやり方を考えていった。

「ワシは仕事してるんや、家のことは家内がするという頭でおったらできないですね。愚痴のひとつも出ますしね。やっぱり仕事してきたから云々じゃなくて、ちょっとした考え方ひとつですね。」

父親は、特別な配慮を要する障害児の世話は、健常児の場合のように気軽に他人に頼むことができない現状を感じとり、〔夫婦でやるしかない〕と覚悟をきめようとしていた。

「他に助けを頼める人はないですね。結局二人でやるしかないんです。」

## IV. 考 察

### 1. 妻の姿につき動かされて生活の基盤を作る父親

障害児をもつ母親は、特に2歳までの介護負担が大きいと報告されている<sup>5)12)</sup>。障害児は、幼児期に入っても年齢相応の身辺自立が困難なため、母親はその世話と家事、同胞の世話を引き受けていた<sup>9)</sup>。父親は自らも昼夜を問わない【障害児の世話に四苦八苦】しながら、自分より子どものそばを離れられない〔かかりきりの妻を案じ〕ていた。そのため父親は、精神的にも〔沈みがちな妻をもり立てる〕役割があると考えていた。つまり父親は、妻の疲労をつぶさに感じ取り、妻が倒れるかもしれないとの危機感をもって子どもへの世話や家事の一部を引き受けていた。しかし父親は、妻の疲れた姿を受けて行動を起こすという、子どもから見ると二次的な位置に立っているようであった。

母親は目の前のわが子と1対1の関係を作るといことが養育に向かう核になるが、父親は1対1の関係というより、妻と子を常に一体のものとして見、それを受けて自分が反応するという間接的な行動をとっていた。こういった父親の行動は、障害児の養育を一義的に引き受ける妻の支えになろうとする行動であると考ええる。

障害児を養育している母親は、日々の世話に苦悩し、父親は将来指向的なつらさを感じている<sup>7)</sup>といわれているが、両者の苦悩は別々のものではなく子どもの養育に向かう互いの位置の違いといえるのではないか。

父親は、日々の世話に加えて現実の暮らしを整えていくために、今まで知らなかった〔障害児の世界になじむ努力〕をしながら子どもの成長に伴って生じることに対応していった。父親は、障害児に必要な〔福祉サービスの利用に骨を折る〕ことや、就学前には〔教育機関への粘り強い交渉〕をすることで、子どもが生活していくための基盤作りをし、それらを

実現するための交渉では父親自らが表舞台に立っていた。こうした父親の行動は、障害児の養育を一義的に引き受けている妻の支えになろうとして見出した父親としての役割意識から起こされたと考えられる。

## 2. 障害児の養育は〔夫婦でやるしかない〕と考える父親

父親は、妻を支えるために自分にできる世話を引き受けていたが、妻から他の父親と比較されることで自分への評価は低く、【あるべき障害児の父親像を模索】していた。この状況を乗り越えるには、障害児を養育するために父親自らが養育の基盤を整えたことと、父親の内面にある障害への見方が変化したことが原動力になった。

幼児をもつ父親の多くは職業人としても多忙であることが推察されるが、本研究で面接した父親は〔世話と仕事とのジレンマ〕を強く感じながらも【障害児と暮らす土壌作り】に自らの役割を見出し、障害児の父親であろうとする姿勢がみられた。

一方、父親は子どもへの世話をしつつも我が子が普通でないことに戸惑う状況にあった。しかし、障害児とともに生活し父親自ら生活の基盤を整える中で、我が子なりの成長を重視するようになり、〔自分に幅が出る〕と評価するほど人間的な成長を遂げていた。つまり父親は、【障害児と暮らす土壌を作る】ことで現実に起こる問題に対処する役割を開拓し、【新たな障害観を手にする】ことで障害への理解が進み、【あるべき障害児の父親像を模索】する状況を乗り越えたと考えられる。

この段階で、父親は障害児の養育は〔夫婦でやるしかない〕ことを強調していた。幼い子どもの養育にあたっては、夫婦以外の育児支援者の存在が母親の育児への負担を軽減する<sup>13)</sup>といわれているが、障害児の場合たとえば身近にいる祖父母に手助けを期待しても障害児の世話に手を出せないこともあり、その反応から父親は気軽に手助けを頼めないと考えていた。そのため、仕事をもつ父親も〔男女分業では回らない〕と考えるようになった。

障害児を養育していく上で困難を感じたとき、母

親が考える支援者は直接的な手助け以外に専門家に知恵を借りる、仲間に相談するなど<sup>10)</sup>、多岐にわたる。しかし、父親の場合、誰にも相談しない父親が3割以上ある<sup>10)</sup>と報告されている。父親は日常の問題についての対処行動でも、自分の中に問題を留める男性特有のコーピング行動<sup>14)</sup>をもつため、配偶者以外に相談相手をもちにくく、家族内での調和を図ることを重要視する<sup>5)14)~16)</sup>といわれている。父親が障害児の養育を夫婦でやろうという考えに至る背景としては、家族内に目を向けることの多い父親の行動特性が反映されていたと考えられる。そうした行動特性がこれからの養育姿勢を方向付け、帰結となる【夫婦でやっていこうと腹をくくる】覚悟をもつに至ったのだと考える。

## V. 結 論

幼児期の障害児をもつ父親の養育行動は、日常の世話行動という養育行動から障害児を育てる父親としての自覚をもたせるプロセスであると考えられた。

父親は、障害児の養育は【夫婦でやっていこうと腹をくくる】覚悟をもつので、妻と二人でやるしかないと思ひこみがちである。そのため、周囲との関係調整に専門職の介入が必要と考えられる。

## VI. 研究の限界と課題

本研究では、比較的重度の障害児をもつ父親の参加が多かったため、軽度の障害児の場合には当てはまらないかもしれない。また研究参加者が近畿圏内でも地方在住者に偏っていたため、地域による文化背景、関係機関から受けるサービスの差による影響があったかもしれない。これらが本研究の限界であり残された課題であると考えられる。

## 謝 辞

研究の趣旨を汲んで快く面接にご協力いただきました研究参加

者のお父様方並びにご家族の皆様と、研究協力者をご紹介いただきました各施設長、関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。また、研究を進める中で、ディスカッションに加わっていただきました本領域の看護師の皆様にご心よりお礼を申し上げます。

〔受付 '05. 2. 14〕  
〔採用 '06. 5. 12〕

文 献

- 1) 蓬瀬さなえ, 中塚善次郎, 藤居真路: 発達障害児をもつ母親のストレス要因 (1), 鳴門教育大学学校教育研究センター紀要, 1:39—47, 1987
- 2) 広瀬たい子, 上田礼子: 脳性麻痺児(者)に対する父親の受容過程について, 小児保健研究, 50(4):489—494, 1991
- 3) 目良秋子: 父親と母親のしつけ方略—育児観・子ども観と父親の育児参加から—, 発達研究, 12:51—58, 1997
- 4) 目良秋子, 柏木恵子: 障害児をもつ親の人格発達—価値観の再構築とその要因—, 発達研究, 13:45—51, 1998
- 5) 泊 祐子, 古株ひろみ, 竹村淳子, 他: 障害児をもつ母親の養育困難に関する研究—双子と単体児に障害をもつ母親の比較—, 滋賀医科大学看護ジャーナル, 1(1):15—28, 2003
- 6) 濱田裕子: 障害のある子どもの親の養育過程, 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 7:61—67, 2000
- 7) 杉原和子, 小松正代, 浜野晋一郎, 他: 重症心身障害児をもつ両親の障害受容と養育姿勢, 小児保健研究, 51(4):517—521, 1992
- 8) 牛尾禮子: 重症心身障害児をもつ母親の人間の成長過程についての研究, 小児保健研究, 57(1):63—70, 1998
- 9) 藤本 幹, 八田達夫, 鎌倉矩子: 重症心身障害児を育てる両親の育児観の分析と家族援助のあり方についての考察, 作業療法, 20:445—456, 2001
- 10) 泊 祐子, 石川清美, 長谷川桂子: 障害児をもつ家族に関する研究, 滋賀看護学術研究会誌, 1(1):24—34, 1996
- 11) 木下康仁: グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生—, 弘文堂, 1999.
- 12) 濱田裕子, 深山智代: 在宅障害児の小学校就学までの母親の養育体験, 日本看護科学学会学術集会講演集, 19:398—399, 1999
- 13) 松田茂樹: 育児ネットワークの構造と母親のWell-Being, 社会学評論, 52(1):33—49, 2001
- 14) Schilling, F., Schinke, P., Kirkhan, A.: COPING WITH A HANDICAPPED CHILD: DIFFERENCES BETWEEN MOTHERS AND FATHERS, Social Science & Medicine, 21(8):857—863, 1985
- 15) 広瀬たい子, 上田礼子: 脳性麻痺児の受容に関する調査—母親を中心に—, 日本看護科学会誌, 19(1):11—20, 1989
- 16) 玉井真理子, 小野恵子: 発達障害乳幼児の父親における障害受容過程—聞き取り調査4事例の検討—, 乳幼児医学・心理学研究, 3(1):27—36, 1994

The Acquisition Processes of Parental Nurturing Behaviors by  
Fathers of Children with Disabilities

Jyunko Takemura<sup>1)</sup>, Yuko Tomari<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>Hospital School of Nursing, Shigaken Saiseikai

<sup>2)</sup>Gifu Prefectural College of Nursing

**Key words :** fathers, children with disabilities, nurturing behaviors

The goal of this study was to determine how fathers of young children with disabilities have acquired parental nurturing behaviors. To this end, semi-structured interviews were conducted with twelve fathers of children with disabilities. The contents of the interviews were recorded with the participants' consent; later, they were transcribed word by word. The transcripts were then analyzed using Grounded Theory Approach. The results were summarized below.

The participating fathers were taking care of their children with disabilities, "struggling with the care of their children with disabilities", but also "being motivated by the presence of their wives, who could not escape from caring for their children with disabilities" They "attempted to determine how an ideal father might deal with children with disabilities" while struggling with doing their work and caring for their children. The fathers' behaviors showed characteristics that indicated that they shaped their behaviors in response to their wives' hard work. As a result of the experience of "struggling with the care of their children with disabilities", the fathers were able to "establish a ground to live with them"; at the same time, they were able to "acquire new views on disabilities." Furthermore, they moved beyond the stage of "attempting to determine how an ideal father might deal with children with disabilities" and reached the point where they "made up their minds to get through it together with their wives as a couple". Such decisions by the fathers were considered to reflect male-particular coping behaviors, which involved tendencies to keep problems within themselves and to find solutions within their families.

---